

編集委員会便り

容器包装リサイクル法の施行により、従来我が国ではあまり明確に意識されることのなかった環境保全のためのコスト負担という意識が目覚めつつある。容器包装リサイクル法は消費者・行政・企業の役割を明確化した点に意義があり、今後それぞれの地域にあった具体的な計画が生まれ育まれていくことになる。

一方現実のリサイクルに関する議論では、もっぱらどう回収するかという点に関心が集中し、集まったごみをどうするかというところまでは十分に検討されていないのが現状ではないだろうか。たとえば紙の市場価格が低落し、古紙の再生が経済的に成り立たないために逆有償という事態も生じかねない。環境保全のために回収した廃棄物から生まれた再生品を使おうという意識を高めることはもちろんであるが、今後は廃棄物をどう処理し、どのように利用すれば資源として最も有効に活用できるかという技術的な視点がより重要になってくる。

エネルギープラントや製鉄プラントなど大規模な生産プロセスでは従来から主生産物以外に大量に発生する廃棄物、副産物を商品として経済的に無理のない形で活用するための努力が続けられてきた。そこで行われている資源活用のための工夫は今後のリサイクル技術を考える上で何らかの指針を与えるものとならないであろうか。

今回の特集はそういった廃棄物、副産物の資源化、

有効活用のための技術といった視点からリサイクル問題を見直し、将来のリサイクル社会の可能性を探るため、現在のプラント現場では廃棄物、副産物を再び資源として活用する工夫がどのように行われているのか、また今後どのような展開が期待されるのかを展望することを目的に企画を行った。内容はエネルギープラント、大規模生産プラントにおける廃棄物、副産物の再資源化技術、プラントで用いられる薬品、触媒等の回収、リサイクル技術、また従来残滓と見なされていた都市ごみ焼却灰の再資源化を目指す技術、プラントにおけるエネルギー回収技術など多岐にわたっている。これらの技術は現在実際にプラントで実施されているものでもあり、現場に近い業界の方々を中心に執筆をお願いした。

大量生産、大量消費、大量廃棄の悪循環から脱却した新しいリサイクル社会の構築は、我々のライフスタイルの転換ともかかわり現実化には課題が多いが、社会が持続可能な発展をしていくためには不可欠である。今回の特集から何らかのヒントが得られれば幸いである。

最後に、本特集を組むにあたりご協力いただいた方々、お忙しい中ご執筆いただいた方々に感謝し、お礼申し上げます。

木村 二三夫

(㈱クボタ 技術開発研究所熱エネルギー部主任技師)